リハビリテーション科学部
作業療法学科 編

OG訪問

つられて、ついこちらもほほ笑んでしまう素敵な笑顔で迎えてくれた若松さん。希望していた訪問リハビリテーションで、利用者さん、家族との一体感ある作業療法を実践しています。

イムス札幌内科リハビリテーション病院
訪問リハビリテーション 作業療法士
若松 來夢さん（リハビリテーション科学部作業療法学科2018年3月卒業）

訪問OTの一日

若松さんの勤務先は本学在学中に9週間の臨床実習を行った病院です。実習中、地域とのつながりの強さに引かれ、「自分のやりたいことが見えてきた」と、迷わず就職の第一志望にしたといいます。1年目は入院患者さんを担当、2年目には強く希望していた訪問リハビリテーション所属となりました。

若松さんの1日は早くに始まります。7時40分頃には出勤し、8時半からのミーティングまでをカルテの確認や論文を読む時間に充てます。9時には車で利用者さん宅へ出発。最大で午前3軒、午後3軒を訪問し、17時頃から記録の整理などデスクワーク、この時間にケーススタディ（事例研究）が行われることもあります。訪問は利用者さんごとに週1～2回、各40分か60分のサイクルです。

同院の訪問リハビリテーションは、作業療法士3人、理学療法士4人、言語聴覚士1人の計8人で札幌市手稲区と西区の一部、小樽市の一部を担当。

例えば洗濯物を干す動作では、何が困難かに合わせて、裏返しにしない、干す前に靴下の左右を揃えるなど工夫します。

生活の中に入って

作業療法士は家事や入浴、着替えなど日常生活の動作を促し、同時に精神面でもサポートする、守備範囲が非常に広い職種です。若松さんも「すべての学問は作業療法に通じる」という本学の授業で聞いた言葉を胸に、様々な職種と連携しながら「作業につながることなら何でもします」といいます。

車椅子で外出を楽しんでいた脳性まひの方が感染症で入院、上体を起こすと血圧が急激に下がるため寝たきりの状態で退院したケースがありました。担当になった若松さんは、医師による投薬の効果を見ながら、車椅子用に用意した大小様々なクッションの数や置き方を調整、無理のない座位の角度を探り、利用者さんは車椅子に戻ることができました。上体を起こすと、寝た姿勢とは視野も全く異なり、QOL（生活の質）は格段に上がります。

呼吸障害があり、歩行も不自由、うつうつとした日を過ごしていた別の利用者さんは、近所に住む娘さんを訪ねたいものの、娘さん宅入り口の10段の階段が障害になって諦めていました。若松さんは利用者さんと一緒に現場に行き、訓練法を考え、娘さんに介助法を指導、訪問リハビリテーションのない日でも父娘2人でできる訓練を提案しました。“自主トレ”は実を結び、10段の壁を克服した利用者さんはすっかり明るくなったといいます。

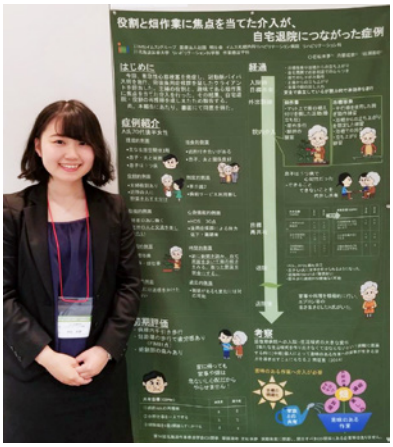
よりよく生きるために

若松さんの上司は「生きるために医学があり、よりよく生きるために作業療法がある」と言ったそうです。リハビリテーションの目標を達成して訪問リハビリテーションから卒業する利用者さんがいる一方、終末期の利用者さんと家族の「最期まで家で」という気持ちをサポートする場合もあります。どちらの場合も利用者さんが「よりよく生きる」ため、生活の場で、生活

在学中は大学祭の実行委員。「ハプニングやトラブルもありましたが、臨機応変な対応、準備の重要性など多くを学びました」（若松さん）。訪問リハビリテーションの初日、人工呼吸器を使う利用者さん宅で落雷による停電に遭っても落ち着いて行動できた強さはここで培われたのかもしれません。

に即した介入ができるいまの仕事に、若松さんは大きなやりがいを感じるといいます。そしてもっと利用者さんの力になりたいと、MTDLP（生活行為向上マネジメント）実践者研修を修了、また、国際的に標準化された評価法AMPSの認定評価者も取得しました。数年先には認定作業療法士の資格取得、大学院入学も視野に入れているといいます。やりがいを個人のものにとどめず、作業療法の発展に生かしていくことも考えているようです。

アグレッシブな若松さんですが、忙しくて自分の時間がないのでは?と聞くと、「これが趣味のようなものですから」と、一際すがすがしい笑顔で答えてくれました。



2019年6月、北海道作業療法学会でポスター発表。同年9月には日本作業療法学会でプレゼンもしました。イムス・グループ内の事例検討会でも優秀賞を獲得しています。